

かわら
種子島の瓦のはじまり

西之表市立図書館長 鮫嶋 安豊

わが国の瓦の伝来について、日本書紀は、「崇峻元年（588）、百濟（朝鮮）から伝えられた。その時、寺工二名、鑿盤（せいてつ）博士一名、画工一名と共に瓦博士が四人渡来した」と記される。種子島の瓦の歴史はどうであったか？『種子島家譜』及び上妻隆直の『懐中島記』などから歴史を探ってみた。

①本源寺 釈迦堂（高棟板葺） ②慈遠寺 釈迦堂（高棟小板葺） ③大会寺 仏祖一堂（平棟板葺）とあり、元禄二年（1689）頃は種子島家の菩提寺（本源寺）や慈遠寺でさえ、未だ板葺きであったことがわかる。

種子島家譜には
・「天明八年（1788）陶工大山五右衛門が瓦を製するを以て組土となす」
・寛政八年（1796）大瀬某、上妻某牧瀬某を蟬澄屋（ろうすめや）に葺く瓦を製し、納め、一世足軽となす。
・文化十二年（1815）許可なく瓦を隆興寺に葺き、役人を叱責したなどと記される。瓦は大変貴重な物で、許可なく瓦を葺くことは固く禁じられていたのである。

近畿大学『民俗文化 21 号』に全国のカワラ前線到達の早さが紹介されている。

- 1 江戸（東京）享保五年（1720）以降
- 2 松前（北海道）明和八年（1771）
- 3 種子島 安永六～七年（1777～78）～天明八年（1788）頃
- 4 弘前（青森）文化六年（1809）
- 5 八戸（青森）文政年間（1825～29）
- 6 対馬（長崎）天保一〇年（1839）
- 7 函館（北海道）安政四年以前（1857）

種子島の瓦葺きは全国 3 位と早い。種子島に比較的早く瓦葺きが普及した理由の一つは台風常襲地帯の強風対策であったと野村孝文教授は指摘している。『南島偉功伝』（西村時彦著）も「種子島の民家の瓦葺きの始まりは安永六～七年（1777～78）頃まで遡り天保一二～一三年（1841～42）頃は農家もかなり改善された」と記される。もう一つ瓦製造を促進したものに能野焼の存在がある。

享保元年（1716）と延享十二年（1725）と刻された陶片が発見されており、能野焼は 1700 年頃には開窯されていたといわれている。しかし、これは陶工大山五右衛門が瓦を造って上納した天明八年（1788）との間に 80 年の開きがある。天明八年より十年前とする『南島偉功伝』の安永七～八年（1777～78）説が最も可能性があると思われるが、これも出典が明らかにされていない。現時点では天明八年（1788）には瓦葺きが始まっており、全国でも第三位と早い時期であったことは間違いなさそうだ。

種子島の民家の瓦葺きの歴史

民家の瓦葺きはいつだろうか？『鹿兒島民俗第 12 卷 2 号』に「藩政時代、農漁民は全部茅葺であった。茅葺から瓦葺きになったのは明治初年から終戦後までかけてであったが、庄司浦では大正期より変わった。新築は少なく、農村部落より買取移転したのが多かった。住吉では大正になると、すでに瓦葺きにほとんどの家が変わっていた。広田では昭和初期まではクサヤが大半だった。第二次大戦前にはほとんどが瓦屋になった」と詳細な報告がある。移住地などでは幾分遅れた例もあったと思われる。

平山広田は草切節の本場。茅場と水田の多い広田の人々が「クサヤ」と呼ぶ藁・茅葺き屋根は幼少期に見た農家の懐かしい隠居屋の原風景でもある。（了）



国上奥 春山家の瓦製厨子
江戸時代、灯明を入れる厨子からの火事が多かったから、瓦製は重宝したと思われる。しかし、類例が少ない。春山家と瓦製造と何か関わりがあるのだろうか？



湊塩釜神社の鬼瓦
製塩は島主の貴重な財源である。寺院・士族屋敷、製塩・精織などの屋根葺きは最も優先された。先述の寛政 8 年「ろうすめや」の瓦葺きが証している。

西之表市史編さんだより

資料紹介

まきのあつよし
移住の恩人「牧野篤好」史料をいただきました

牧野篤好氏は、静岡県出身で、明治時代に役人として来島し、永年種子島のために尽した人物です。令和 3 年 11 月に行った市史編さん調査によって、篤好氏ご子孫のお宅に貴重な史料が良好な状態で保管されていることが明らかとなりました。

その後、ご子孫の牧野栄一様から史料寄贈の申し出があり、このたび史料 32 点をご寄贈いただくこととなりました。

本市は、西町の大火災や太平洋戦争の戦災等によって終戦前の資料の多くを消失してしまっており、明治から昭和初期の記録は少ない状況でした。

「牧野篤好」史料には、甑島から種子島への移住事業の内容や島内の村の様子を視察して回った所見などが詳細に記されており、明治時代の種子島の様子をうかがい知ることができます。

～牧野栄一様、貴重な史料をありがとうございます～



牧野篤好が書き記した「竊塵集」



篤好氏が種子島から持ち帰ったザボン



牧野篤好氏の顕彰碑（西村天四撰）



鉄砲館で行われていた史料展示（6/28 まで）

牧野篤好（1847）とは

牧野篤好氏は、静岡県東郡棚草村生まれで、明治 16 年に役人として来島して以来、20 年間に渡り、種子島のために尽した人物です。

明治 19、20 年の甑島からの大規模移住の際には、世話係主任として移住民のために奔走しました。甑島からの移住民の間で天然痘が流行したときには、自ら看護・埋葬にあたり、自身も罹患してしまいました。

熊毛郡長となり、島の勸業奨学に努め、島民から慕われました。

明治 35 年に退官して静岡に帰ると、種子島が茶業に適するとして移住を勧めました。それにより静岡県から番屋峯に入植した人たちが茶園を造成し、以後、一般農家にも茶の栽培が普及し、種子島は県下における茶業の先進地となりました。

また、牧野氏のおつを頼って静岡から国上大田に移住してきた算家は、工夫を凝らして生活を豊かにし、林業をはじめとする様々な事業を興して地域の発展にも寄与しています。

牧野篤好氏は、関わる人々に寄り添い、橋渡し役も務めた、まさに移住の恩人ともいえるべき人ではないでしょうか。



自然部会

名前に「タネ」を冠した野鳥

尾形 之善 (種子島開発総合センター)

種子島に生息する野鳥のうち、名前に「タネ」のつく野鳥が、3種います。タネヤマガラ、タネアオゲラ、タネコマドリの3種です。いずれもヤマガラ、アオゲラ、コマドリの亜種で留鳥です。

タネヤマガラは種子島唯一の固有亜種で、スズメ大の人なつっこい鳥です。林縁や住宅地の植え込みなどにやってきて、人がいればそばまで近寄ってきます。「ジュージュージュ」とか「ツツピー、ツツピー」と鳴きます。この鳥を方言で「すんすんぴー」とか「すーすんぴー」とか呼びますが、学名はなんと「*Poecile varius sunsunpi* Kuroda」で、種子島の方言がそのまま採用されていて、思わず笑ってしまいます。

タネアオゲラは種子島と屋久島共通の固有亜種で、ヒヨドリよりやや大きいキツツキの仲間です。主に森林に生息していますが、時々市街地近辺までやってくる場合があります。「カカカカカ」と枯木をドラミングする音や「キョッ、キョッ」という鳴き声で、それと分かります。めったに人前に姿を見せることのない鳥ですが、まれに電柱の天辺に止まり、「ピョー、ピョー」と大きな声をあげることがあります。頭部に赤い模様の入った緑色系の鳥です。



電柱に止まったタネアオゲラ

タネコマドリは種子島、屋久島、伊豆諸島共通の固有亜種で、アカヒゲによく似た鳥です。種小名(学名の一部)はコマドリが *akahige* で、アカヒゲが *komadori* となっています。この名前の取り違えは、オランダの動物学者テミンクの著作「新編彩色鳥類図譜」(1820~38年)の間違いに起因しているということです。タネコマドリはきわめて古い記録があるだけで、その後何十年も目撃されていません。絶滅してしまったのでしょうか。島内でこの鳥に出会うようなことがあったら、是非写真に撮って鉄砲館にお知らせください。

校区史部会

見つけたぞ! 「安城の田の神山」

小山田 一郎 (安城校区担当)

『西之表市の伝説』(昭和40年発行)に、「西之表市安城本村の字『上上寺山』にある。ふつう『田の神の鼻』という所。此の鼻は田の中に幾分突出している。以前はアコーの木や松があったが今は松だけ。自然石を置いてある。文字はない。……」と記載された安城の田の神山。一体何処にどんな形で存在するのか。幾人もの村人達に尋ねるも、返ってくるのはいつもつれない返事。航空写真と地図を頼りにその痕跡を求めて何度も現地を訪れ、山の中を彷徨い歩く。そして、失望。「もう探すのは無理だ。」と諦めかけたとき、飛び込んできた朗報。



田を眼下に臨む山中に祀られている



安城の田の豊作をひっそりと願う

「安城下之町の方からの有力情報有り。」のメール。急遽、事務局と調査日の打ち合わせをして、二人で探索に向かう。目指すは浦ン田に接した字「井出下」の高台だ。鉞や鎌を持って探索開始。「なぜ、井出下?」半信半疑ながら竹を払い山道を上る。右手は凹地、左手は凸地。凸地の方が田圃側だ。「よし、こっちだ。」即座の判断。足を進める。「あった!」桜樹の下に1坪位の平石、そして倒れてはいるが長さ50坪位の自然石と焼酎の2合瓶2本。あれほど探し求めた田の神山。今までの苦労に比べれば、あっけない幕切れであった。

~情報を提供して下さった徳永ムツ子さん、川畑美和子さん ありがとうございます!~
田の神山まだまだ調査しています。大崎、花里崎、伊関、沖ヶ浜田 情報募集中です!

先史部会

石の道具の使い方

寒川朋枝 (鹿児島大学埋蔵文化財調査センター)

考古学は、遺跡の発掘をして昔の人々がどのような活動をしてきたかを探求する学問です。遺跡からは、土器や石器などの遺物が出土します。土器は、主に煮沸具や入れ物として使用されたことが想像できると思いますが、石器については、具体的にどのように使用されていた道具なのかを判断することが難しいものも多くあります。

石器の機能を明らかにするための方法としては、顕微鏡などで石器にできたキズや光沢、衝撃による割れなどを観察する「使用痕分析」と呼ばれる分析方法があります。そして、出土した石器と同じような石器を複製して、それを実際に使用し、どのような痕跡が残るかを実際の遺物と比較・観察するという実験的方法も並行して行います。この作業により、狩猟具であったのか、それともナイフのような加工具であったのか、など機能を推定することができます。また、丸い礫の形をした磨石・敲石と呼ばれる石器表面の小さな凹みから、デンプン粒が検出されることがあります。多くは土中の細菌により分解されると考えられているデンプンですが、土に埋まっている条件などによってはその一部が残っており、そのような石器では木の実を潰すなどの加工を行っていた可能性も考えられます。

種子島の旧石器時代の特徴として、立切遺跡でみつかった34000年を遡る日本最古級の落とし穴遺構などが注目されているほか、当時の環境は、日本列島の他地域に比べ温暖な気候で植物質食糧も豊富であったことが指摘されており、その加工具と思われる石器も出土しています。上記のような方法を用いて石器の分析を行うことで、当時の人々の道具の機能が具体的に明らかになり、私たちははるか昔の人々の営みの様子を、より身近に感じられるようになるのではないかと思います。



鬼ヶ野遺跡(縄文時代草創期)出土石皿の敲打痕 (種子島開発総合センター蔵)

市史編さん事業の経過 (3月以降)

- 3月9日 住吉校区石碑・石塔調査
- 16日~18日 自然部会地質調査
- 25日 市史編さんだより第8号発行
- 28日~30日 自然部会植生調査
- 4月20日 自然部会陸産貝調査
- 25日 静岡県牧野家訪問
- 5月12日 近現代部会オンライン協議
- 16日 西之表市史編さん委員会
- 18日 自然部会稀少植物調査
- 26日 安城田の神山調査
- 29日 鹿児島県立図書館資料調査
- 6月2日 本立集落のガラン調査

市内に建てられた石碑・石塔の調査を行っています。現在約490基を確認しました。碑文が入ったものもありますが、経年劣化で誰が何のために建てたのか分からない石塔もあります。右は深川の石塔。



ガロー(ガラン)の調査もしています。昔の人は、荒らすと祟ったり、入ってはいけないヤブや湧水地をそう呼んでいましたが、時代の流れとともに忘れ去られようとしています。民俗学者故下野敏見氏によれば、昭和30年代には市内に48か所のガローがあったとされています。



本立 斧乙田のガラン

事務局からのお願い
ホイトウ(馬による代掻き)、養蚕の写真が大募集しています!
お持ちの方は是非ご連絡ください!